神農本艸經　單

T 70
30
T81-34

本草經卷上

玉泉　丹沙　水銀　空青

曾青　白青　扁青　石膽

雲母　朴消　消石　樊石

滑石　紫石英　白石英　五色石脂

大一禹餘粮　禹餘粮　青芝

赤芝　黃芝　白芝　黑芝

紫芝　赤箭　伏苓　松脂

柏實　箘桂　牡桂　天門冬

麥門冬　朮　女萎　乾地黃

おほちのきこえ印刷局に出てつかへ
られしハ七十あまり三ツ乃としなり
をりをりきこえまつりさの務とめ
まいらしまれて七とせ程つかへまつり給ひ
やうし年たけあかなひぬまくらとて
こその一月に休養のおほせかうむり
家にありて一つかま月日をおくし給ひ

神農本草經攷異

しかその年の十一月六日といふ日に
つひに身まかり給ひぬ齢は七十九
まそおはしまし〳〵比博く物学
ばれし中にも本草の学を専らと極
めたまひ其の神農本草経のみなら
あるは綴縫めたゝさんとて数年の心さく
をつくしたまひその書つひに成りて

安政の初乃年にゑりまきとさせ給
ひしかいぬるとしその板ゆゑなく火
に失せにけれを惜みたまふ心乃やる
かたなさにその後再乃梓にのほせて又
光をとげるもひぬかくと心をこめられし
書なれハこれそ故先君の御霊
なくさむべきよすかなるとて七七の忌日に

それとも手をいかなる作らせて思はれ

ともかきとて一子の人々にうけあり

はからせ文みなかくめでせられしまゝ

蔵の紙碑ともこれに添へこれとともて

世になき跡を而ひたする志しとての

なかなかしのことや

なき人のふみまよひし百草も

その文こそかゞみなりけれ

明治十九年一月二十写

松園孫女　くわう